

---

# 少年と少女と本の叙事詩

雨永祭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少年と少女と本の叙事詩

### 【Nコード】

N0895C

### 【作者名】

雨永祭

### 【あらすじ】

少年は絶望と戦いに身を委ね、少女は希望と愛に突き進む。幾多の出会いと幾多の惨劇。意志を継いだ者達の一大叙事詩。

## 序章 一篇へある少年のプロローグ（前書き）

『受け継ぐ者の譚詩曲』を直したり、整理したりしました。

それではお楽しみ下さい

序章 一篇へある少年のプロローグ

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

赤く、  
紅く炎に彩られた夜空。

狂喜と狂気、恐怖と絶望が辺りに拡がっている。

風に流されてきた嗅ぎなれない血の匂いと人肉の焼ける匂い、男達の邪悪な笑い声にすべての感覚を狂わせられる。

「はあ……はあ……うっくっ、……はあっ……はあっ……」

十歳にも満たないその少年は、ただひたすら森の中を逃げていた。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

怖い、怖い怖い、怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

恐怖に急ぎ立てられて躓きながらもひたすら足を動かし続ける。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ！」

その少年は三冊の本を大事そうに抱えていた。

一冊目は和綴じの古い書物。二冊目はこれもまた和綴じの一冊目よりは新しいがやはり古い書物。三冊目は新品同様のハードカバーの本。

大事な物なのかがつちりと抱えている。

どれだけ走ったのだろうか、不意に開けた場所に出た。

そこで少年は立ち止まり、振り返る。  
夜空は赤く、紅く炎に彩られたまま。

……本当に逃げて来て良かったんだろうか？

そんな思いが湧き上がってくる。

そして、自分を逃がす為に一人村に残った母の顔が脳裏に浮かぶ。

……良い訳が無い。

母さんが頑張ってるのに黙って見てるだけなんて……僕は嫌だ  
っ！

「母さんっ！」

少年は駆け出した。

もう恐怖は無かった。母親を助けたいという一心で元来た道を駆け  
ける。

しばらく走ると血と人肉が焼ける匂いが強烈になって来た。なぜ  
か男達の笑い声は聞こえない。そして、一人の少女が少年の方に向  
かって駆けて来ていた。その周囲に三振りの刀が浮いている。

その少女は向かって来る少年を見て目を見開く。

「御子息様っ！何をしていらっしやるんです、どうして戻って来た  
のですか!？」

「鈴鹿っ、僕だけ逃げるなんて出来ないよ！母さんを助けなきゃっ  
!!!」

少年の必死な叫び。その時轟音と共に天高く火柱が上がった。

「……なっ!？」  
「アレは……」

少年と鈴鹿と呼ばれた少女は火柱を見上げる。

「アレは八岐大蛇……」  
ヤマタノオロチ

鈴鹿が呟くと火柱の中から八つの炎の龍が現れた。

「な、何あれ……母さん………母さんは大丈夫なの!？」

鈴鹿は突然少年の手を取り八岐大蛇から離れる様に走り出す。

「ちょっ……鈴鹿っ!？」

「急いで下さい。アカネ様のアレを出したと言う事はアカネ様はもう……」

走りながら鈴鹿は一瞬目を伏せる。

「……え？」

「とにかく巻き添えを食わない様に離れなければいけません」

鈴鹿は急かしたが少年は立ち止まった。

「母さん……母さんはっ!？」

「御子息様……」

ズガガガガガッ!!

その時凄まじい衝撃波が二人に襲いかかった。

「御子息様っ!!」

少年はただ凄まじい音がした事と鈴鹿が自分を押し倒した事だけしか分からなかった。

「うつ……す、ずか？」

「大丈夫ですか？」

「う、うん……」

起き上がって目に映る風景に少年は驚愕した。

「何……これ………」

木々が薙ぎ倒されていた。少年と鈴鹿がいる場所からでも村は跡形も無くなっているのがわかった。

「これは八岐の炎です。使用したのが『写本』だったから助かった様なものですよ、御子息様」

鈴鹿は優しく、優しく少年を抱き締める。

「ご、ごめん……」

「いいんです。御子息様が無事なら。アカネ様も喜びます」

少年ははっとした。

「そ、そうだ！母さんはっ、母さんはどうしたの！？」

鈴鹿は少年に穏やかさに悲しみを含んだ笑み見せる。

「御子息様、良く聞いて下さい。アカネ様は貴方や村の人達を見事に守ったんです。貴方はそれを誇って下さいね。『自分の母親は凄いいんだぞ』って」

「鈴鹿は一体何を言って……」

鈴鹿は少年に、まるで母親が諭す様に語りかける。

「御子息様、決して落ち込まないで。真っ直ぐ、正直に、生きて下さい。それがアカネ様の願いなんです」

「それじゃ……母……さんは……」

少年の目に涙があふれ出てくる。

「泣かないで下さい」

少年の涙を指で拭い取り、また抱き締める。

そこで少年は気付いた。鈴鹿の身体が透けて来ている事に。

「鈴鹿っ、体がっ!」

透けて来ている自分の体を見て鈴鹿は哀しげに微笑んだ。

「アカネ様から託された魔力がもう残り少ないみたいです。本当はアキト様の所まで御供したかったですけどね」

「す……ずか……」

鈴鹿は少年の頭を撫でてやる。

「ほらほら、メソメソしないでシャンとして下さい」

「……うん」

「良い子です。では最後にアカネ様からの最期の伝言があります。

『不出来な母親でごめんね。でも愛してるわ、アメナ』、と」

「か……さん……」



少年は涙を流し、鈴鹿はどんどん透けていく。

「御子息様、めげる事無く強く、強く生きて下さい」

「……うつうつ……」

「それに私とは永遠の別れというわけじゃありません。貴方が『識<sup>しき</sup>神術<sup>がみじゅつ</sup>』を学ぶのだったら、その『田村草子』があればいつでも会えるようになります。それでは御子息……いや、アメナ様また会えるその日までさようならです」

鈴鹿は少年に頭を下げて消えていった。

そして、少年は堰を切った様に泣き出した。

「うわああああああああああああつ！」

少年は泣き終えると村の跡地に母親の墓を作った。そしてその墓に花を添える。

「……母さん、僕強くなるよ。もう大事な人を失わない様に……」

少年はそれだけ言々と走り去った。

……七年後……

朝靄が立ち込める森の中、黒髪に深紅の瞳を持った少年が一人静かに佇んでいた。

その少年は黒いタートルネック、黒いズボン、その上に驚色つくすいろの着流しを着て、それをベルトで縛り、そのベルトに和綴じの本を二冊、ハードカバーの本を一冊の計三冊を腰に吊っていた。

右手には指抜きさしぬきの黒い手甲、左手には指抜きさしぬきの黒い薄手の手袋をつけ、その上から籠手かごてを着けている。

少年の格好はかなり独特、悪く言えばかなり変だった。

更にその左手に四尺はあるだろう太刀を持っていて、周囲には三尺ばかりの刀と二尺に満たない刀が『浮いて』いる。

少年は目の前の木と相対し、腰を落として独特の構えをとる。

それは和国特有わこくの『居合』という剣術だった。（少年が持つてる刀は和国特有の刀剣）

少年は、

「ふっ!!」

という掛け声を上げる。

一閃。

抜刀した瞬間はまったく見えず、辛うじて腕がぶれたのが分かるだけだった。

チンツと音を立てて納刀すると相対していた木が斜めにズレ、倒れだす。そして太刀を手放し周囲に浮いている二振りの刀を素早く抜き、高く跳躍。

「はっ!!」

着地と同時に納刀すると倒れてきた木はバラバラになって地面に落ちた。

「ふう…」

少年が一息つくとな誰かが手を叩いた。

パンッパンッパンッ

後ろに老人がいた。その老人が感心した様に手を叩いていた。

「流石じゃな、アメナ」

少年は老人の方を向き冷やかに見やる。

「エロじじい。煽てても薪運びの手伝いしか無いぞ」

すると老人は突然頬に手をあてて腰をクネクネと色っぽく動かしだし女言葉で身の毛もよだつ事を言い放った。

「いゃん エロじじいなんて呼んじゃ嫌。アツちゃんってよ・ん・で」

ゾワッ。

背筋に悪寒が走る。

アメナは太刀を抜き、老人の鼻先数ミル（1ミルは1ミリ）のところに突き付けた。

老人はピシリと固まった。

「そんなに大通連の錆びにされたいか、エロじじい」

「ご、ごめんなさひ……」

「ったく……」

アメナは大通連を鞘に収めて腰に吊した三冊の本から和綴じの古びた書物を一冊左手で取り、

「送還」

と呟くと周囲に浮いていた大通連を含む三振りの刀が書物に消えていった。

「ふざけて無いで薪運びを手伝ってくれ」

そして二人はいそいそと薪を集め始めた。

二人は背に薪を担ぎ森を抜けるとすぐアメナの住んでいる『孤児院』が見えた。

「おっ！っ！」

孤児院の方から小さな女の子が嬉しそうに走って来た。

「おっ！っ！」

老人はその娘を見て嬉しそうにアメナの前に出る。

「ルナ！儂を迎えに来てくれたのかあ！」

駆けて来た幼女・ルナはアメナの前に出た老人を見て目を細めると走るスピードを上げ、

「邪魔だ、エロじじいっ！」

華麗な踏切で、老人の股間に見事なドロップキックを決めた。

「ふうぐうつ！！」

老人は目をカツと見開き、力無く崩れ落ち呻く。ルナはそんな老人を無視してアメナに飛び付いた。

「アーにいっおかえりいっ！」

アメナはそんなルナの頭を撫でて褒めた。

「見事なドロップキックだった。前よりキレが良くなっていたぞ」  
「えへへへ」

嬉しそうに目を細めるとあつ、という顔をした。

「そうだ！アーにい、あのねあのね、くらでうすし……し……し  
しよがっこつてとこからお手紙が来てたよ！」

突然、老人が起き上がって叫んだ。

「なんとっ、それは真かつ！ 急ぐぞいアメナ！ ルナ！」

そして孤児院に向かって股間の痛みも忘れて走り出した。ルナもそれにつられて走り出す。

「あーっ、待ってよおじいちゃん！アーにいても早く早くっ」

アメナの顔に笑みが浮かぶ。

「今行くからそう急かすな」

自分の事で我が事のように喜ぶ老人やルナを見てアメナは思う。  
この大事な人達の笑顔を守りたいと。

「ただいまっ！」

「ただいまっ！」

「お、おかえり……」

老人とルナは玄関前を掃除していた少女の側をビュンツと過ぎ去り騒がしく家の中に入っていった。

あの二人どうしたんだろっ、と少女が首を傾げているとアメナが来た。

「ただいま、プリセア」

「おかえり、アメナ兄さん。薪運びご苦労様」

「ああ、お前もご苦労様。クラディウス司書学校から手紙が来たそうだな」

「うん、居間のテーブルの上に置いてるよ」

「そうか。すまないが……」

アメナは背負った薪を降ろし、プリセアの前に置いた。

「代わりに薪を庭に置いて来てくれないか？」

「え、いいけど……」

プリセアが訝しげに言うと

「すまんっ！」

と言ってドタン！ バタン！ と家の中に入ってしまった。

「駄目じゃっ！ 儂が開けるんじゃ！」

「僕が開けるんだっ！」

「私っ！」

「俺だって！」

「私が開けるの！」

老人の周りに子供達が群がっていた。

老人の手には一通の手紙。老人と子供は誰が手紙を開けるかで争っているようだった。

「ええい！ 退けるんじゃ童共！ 儂が開けると言うところうがぁ！」  
「戯言も大概にしるエロじじい」

老人と子供達の後ろにアメナが呆れ顔で立っていた。

「ア、アメナ！」

「アメナお兄ちゃん……」

「お兄ちゃん！」

「げっ、アメナ兄ちゃん……」

「アーにい……」

老人と子供達は気まずそう固まった。アメナは溜め息をついて老人の手から手紙を取り上げた。

「まったく何阿呆な事してるんだ。あと、人の手紙を勝手に読もうとするな」

その言葉にしょんぼりする老人と子供達を尻目に手紙の封を開けて手紙を読み始める。

アメナは読み終わるとテーブルの上に手紙を置く。

「ど、どうじゃった？」

老人も子供達も心配そうにアメナを見る。

「ふっ……問題無い。無事合格出来たさ」

「「「「「いやったあ~~~~っ!!」「」「」「」

アメナが笑みを浮かべて言いやると老人と子供達は歓声を上げて喜んだ。

「じゃあ俺は支度してくるよ」



アメナはそれだけ言い居間を出ていった。

居間を出たところで掃除を終えたプリセアが歩いて来た。

「アメナ兄さん、どうだったの？」

「無事に受かった」

「そっか、良かった」

「それでなんだが……」

アメナは少し言い淀み、

「今日中に出立しようと思う」

「な、なんで!？」

困惑するプリセアを見てアメナは苦笑する。

「そんな顔するな、良く考えてもみる。ここからクラディウス司書学校まで相当な距離がある。大体、入学式は一週間後だ」

「……………確かに今日明日にでも向かわないときついね」

アメナは頷いた後何処か遠い目で窓から外を見て呟いた。

「それに行く前に寄りたい場所もあるしな」

プリセアはそんなアメナを不思議そうな目で見る。

「アメナ兄さん？」

「ん？ いやなんでもないよ。」

それより俺は支度をするから他の奴等に今日ここを出る事を伝えておいてくれ」

「うん、わかった」

プリセアは頷いて居間に入っていく、アメナは部屋へ戻り旅の支度と学校の準備を始めた。

玄関前に子供達が集まっていた。子供達の何人かは泣きそうになっていて、それをプリセアが慰めている。

「ほらルナもアンも泣かないの。もう会えなくなるわけじゃ無いんだから」

「う、うん……」

アメナはそんな光景を見て思わず笑ってしまう。ふと老人がいない事に気付いた。

「プリセア、アクトじいさんはどうした？」

「なんか私の話を聞いてすぐに自分の部屋に行ってたけど……」

丁度その時老人・アクトが扉を開けて出て来た。

「またせたの」

いつに無く真面目な顔をするアクト。

そんなアクトにアメナは、

「そんな顔も出来たのか……」

そう言い放つ。プリセア達もそうだとばかりに頷く。  
アキトは真面目な顔から一転情けない顔になった。

「なんじゃなんじゃ！ その反応はっ、僕は真面目な顔しちゃいかんのかぁ！」

アキト以外の全員が困った顔で見合わせる。

「そんな事言われても……なあ」

「そうよねえ」

「じいちゃんいつも阿呆な事してるし……」

「だよね……」

「そうそう」

「エロじじいだもん」

そんな事言われて泣き崩れる。言われてる事は事実なせいか、かなり堪えたらしい。

「ううつ、儂つて一体……」

「仕方ないだろ。自業自得だ……ん？」

アメナはアキトが手に何かを持っている事に気付く。

「それは？」

「これか？」

アキトは立ち上がり持っている物を見せる。

「勾玉……か？」

アキトの手の上には1・5セル程（1セルは1センチ）の勾玉のイヤリングがあった。

「そうじゃ。まあ御守りみたいなもんじゃな。幾多の戦場から帰還して来た若かりし日の儂が着けていた物じゃから効力は折紙付きじゃ」

「ありがとう」

アメナはそれを受け取り耳に着けた。

「うむ、よく似合っとる」

アキトはイヤリングを着けたアメナを見て褒める。  
アメナは一歩下がって皆を見る。

「それじゃあ俺はそろそろ行く。プリセアとアルはルナ達の面倒をちゃんと見るんだぞ」

「大丈夫だよ」

「わあってるよ」

プリセアとアルと呼ばれた少年は当然だとばかりに頷く。

「ルナとアンとレイもあんまり迷惑掛けるなよ？」

「うん！」「」

三人は元気よく頷き、アメナはそれを嬉しく思いアキトを見据える。

「アキトじいさん。年甲斐のない事ばかりするなよ」

アキトはあからさまに嫌そうな顔。

「なんじゃそれは」

アメナは苦笑する。

「まあとにかくだ、皆をよろしく頼むよ」  
「当たり前じゃ。儂を誰だと思ってる」

アキトはニヤリと笑い親指を立てて拳を突き出す。それを見てアメナは笑う。

「そうだな。じゃ、いつてきます」  
『いつてらっしゃい!』

こうしてアメナは旅立った。

この少年がある少女と出会った時、『運命』という名の『物語』が動き出す。

## 序章 一篇へある少年のプロローグ（後書き）

と、いう訳でいかがでしたか？

このオリアス叙事詩はかなりのスローペースで進むと思います。

……申し訳無いです。

それでも出来る限り早く更新していけるよう頑張りますのでよろしくお願いします。

## 二篇へある少女のプロローグ

オリアス国王宮。そこのある一室。少女は大きな天蓋付きのベッドの上で小さな寝息を立てていた。

「すー、すー」

ガギンツガギンツ！

けたたましい金属音が辺りに鳴り響いた。

「うわっ！ なっ何？」

少女は慌てて飛び起きた。

「何この音…」

少女はベッドから降り、恐る恐る戸に近付くと

バンツ！

「うひゃっ！」

勢い良く戸が開き黒い甲冑に身を包んだ男が部屋に入ってきた。

「王女か……これはつか……」

「きゃあああああああつー！」

邪悪な笑みを浮かべた男の話は少女の悲鳴で遮られた。

「いやあああああああつ!!」  
「ぬうおっ!!」

パニックを起こした少女は近くにあった物を手当たり次第に男に投げ付けた。

指輪。ブレスレット。ネックレス。ティアラ。小物入れ。椅子。  
投げる物はどんどん凶悪になっていく。

「おい、ちよつやめっ!!」  
「いやああああああああ!!」

少女は鏡台を持ち上げて投げる。

「おいおい勘弁してくれ…よっ!!」

男は咄嗟に横に避け、剣を抜き少女との距離を詰める。

「もう容赦し…ね…」

男は信じられないものを見た。少女は置いてあったピアノを持ち上げて自分に投げようとしていた。

「来ないで~~~~っ!!」

ズズンッ!

男は避ける事が出来ずにピアノの下敷きになった。

「はぁ……はぁ……はぁ……。……あれ、さっきの変な男の人は？」



少女は周囲を見渡すが誰もいない。しかし先程よりも王宮内は騒がしくなっていた。

「ま、いつか。それより何が起こってるんだろ？」

少女は寝間着のまま走って部屋を出て行った。

少女は王宮中を走り回った。その時に追われたり。追われたり。追われたり。お陰で此所は今襲われてる事がわかった。辺りには兵達の死体も転がっていたが少女は吐気を堪えて走り回った。

父が見つからない。

その事が少女をひたすらに走らせた。あと探してない部屋は謁見の間だけ、少女は扉の前に到着すると勢い良く開けた。

「お父さんっ！！」

少女が入る少し前の謁見の間。

少女の父『オリアス王』カイルは將軍・コースト、宰相・シンダ  
ンと共に奇妙な少年と相対していた。

その少年は白髪、白い肌、着ている物は白いコート、白いセー  
ター、白いスラックス、白いブーツ。そんな白い少年はただ一つだけ、  
瞳だけが見る者に恐怖を与える真紅の瞳をしていた。

「誰だ貴様」

「僕ですか？ これは失礼。僕の名前はディアナ・ペルシウス。今  
宵はオリアス国の王であり自身も『第一階』司書である貴方が持つ  
という『エッダ』の『原本』を貰い請けに参りました」

白い少年・ディアナは丁寧にお辞儀した。

「なんだ、ふざけてるのか？」

非常に有能だがまだ若いシンダンは不快そうにカイルとコースト  
に呟いた。

「わからん。だが侮ってはいかな」

コーストはシンダンを軽くたしなめ、ディアナを見据える。シン

ダンも苦笑しディアナを見据えた。カイルは黙り込み懐の『本』に手をかけた。

あの少年はやばいな、普通じゃない……。

ディアナは顔に笑みを浮かべる。

それは不敵で。

それは愉快そうで。

それは哀しげで。

それは不気味で。

悦楽と快楽と狂喜と狂気が縋い交ぜになった笑顔。  
そして

「『天照の鬼姫』アカネ・ムラクモは強かったよ。とても楽しかった。任務自体は失敗したけどね。あつははは 今のところ写本で僕を傷付けられたの彼女だけなんだあ。

[illegible]

笑い出す。

ディアナの言葉に二人に戦慄が走った。

「ムラクモがお前に殺られたの……か……？」

「アカネさんが……？」

.....

コーストもシンダンも信じられなかった。こんな少年にアカネが殺されたのだという事実は認めがたいものだ。ただカイルだけが下を向く。こめかみには血管が浮き出ていた。

「……様が……」

カイルは懐から本を出した。

「……貴様が」

膨大な魔力が溢れ出る。

「……殺す」

殺気が急激に膨れ上がった。

「カイル……」

「陛下……」

[illegible]

ディアナは嘲る様に、子供の様に笑った。

「巫山戯るなよ、小僧……。」

「北歐に語られし神々の物語　主神オーディンが振るいし銀槍　折れる事無き神槍　外れる事無きその力　顕現せよ！　神槍グングニルッー！」

カイルは左手に本を持ち、詠唱。

風に吹かれた様にページが捲られる。あるページで止まるとそこが光りカイルの左手甲に刻まれている『書界陣』が浮かび上がる。そして、そこから槍の柄が現れ、それを引き抜く。

それは幅広で長めの鍬の付いた銀槍だった。

「へえ、それがグングニルかあ……格好良いなあ」

ディアナはカイルが出したグングニルを見て年相応の子供の様にはしゃいだ。

「それじゃあ僕も出さないかね

『ギリシヤに語られし幾千の神々の物語 時空神クロノスが振りかざし大鎌 権威を破滅させし力

主神ゼウスが振るいし神雷 大地を裂き砕く天雷 天空を支配する雷

顕現せよ！ クロノスの大鎌 ゼウスの雷！』」

ディアナは何も持たずに詠唱する。そして背後に大きな書界陣が現れそこから身の丈の二倍はある大鎌を引き抜くと同時に凄まじい雷が現れディアナの周りを取り巻いた。

グングニルを構えるカイルは識神を二体同時召喚したディアナを見てコーストとシンダンに目配せした。

コーストは頷き腰に差した剣を抜き、シンダンは背中の中の弓をとった。

「『我が剣に刻まれたテンカの物語 大岩を穿つ水 全てを押し流す流水 我に纏いて力を振えっ！ 顕現せよ！ カソン！』」

「『月光の狩人の物語 天を射る膨大な軌跡 すべてを惑わす狂気の光 陽光を返す尽きる事無き月光の矢 顕現せよ！ ルナティツクアロー！』」

コーストは体に水を纏い、シンダンが弓に一本の光の矢を番える。水を纏い剣を構えるコーストと弓をディアナに向けるシンダン、そして、グングニルを構えるカイル。対するディアナは雷を帯び、大鎌を担ぐ。

「さあ、僕を楽しませてね」

「……何…これ……」

勢い良く謁見の間の扉を開けた少女が見たのは扉の側でうずくまるボロボロのコーストとシンダン、そして王座の前でディアナと死闘を繰り広げている父・カイルだった。

少女は自分の目を疑った。

父の相手は自分と同じくらいの少年だったのだから。

ただ少女は少年・ディアナを怖いと思った。

……あれは人の目じゃないよ…。

赤い瞳。その赤は澱んでいる。

少女は居ても立っても居られなかった。

「お父さんっ！…！」

カイルは驚いて自分の元に来ようとする娘を見た。

「余所見しちやダメ」

ディアナが雷を纏った大鎌を薙払う。

「……くっ」

それを辛うじてグングニルの柄で受け止めると叫び、駆け寄って来る娘を制した。

「くるなっ！ リーネア！」

少女・リーネアはカイルの叫びに立ち止まる。

「……………お父さん」

「な〜にしてるのかなあ〜？」

ディアナはカイルの後ろにいるリーネアを見た。大きく口を歪ませる。

「いいものみい〜つけた」

「…ひっ！」

それを見たリーネアは腰を抜かしてその場にへたりこむ。

「…ちいっ！ はあああっ！」

カイルは受け止めていた大鎌を柄で打ち上げ、がら空きになったディアナの胸を思いつ切り雑払う。

ディアナはその攻撃を後ろに飛び退き大きく距離を取る。

ディアナはただ笑い、カイルは背後のリーネアに話し掛けた。

「動けるか、リーネア」

「こ、腰が抜けちゃって…」

バチィッ！

「くっ！」

カイルの足下に雷撃。それを間一髪で避けるとディアナは顔を狂気に歪める。

「うふふつ、余所見しちゃダメだってば」

ディアナが纏う雷が無数の球体を作る。

「リーネア、コーストもシンダンも動けない。何とかして俺から離れるんだ」

「……う、うん」

カイルはリーネアに囁き、リーネアは腕の力で下がり始めた。ディアナが作った雷の球体は集まり三つ球体を作る。その一つ一つが高密度に圧縮された雷の固まり。ディアナが告げる。

「『終焉の破壊神』カイル・スルーズ。貴方にこの攻撃は避けられない」

そして

「我が放つは神速の突撃槍やり 穿て『ライティングランス』」

雷の槍はカイルではなく、リーネアに向かう。

「……え……」



恐怖に目を見開くリーネア。

雷の槍は神速。

リーネア的位置は駆け寄っても絶対に間に合わない絶望的な距離。

「……っ！ くっそがあああああああっ！ グングニルッ！  
娘を俺に帰すと契約しろっ！」

カイルは叫びグングニルをリーネアの足下に投げる。

グングニルは雷の槍が届く寸前にリーネアの足下に突き刺さる。

雷の槍がグングニルに当たり凄まじい雷鳴を轟く。

「リーネアッ！」

カイルは急いで娘の元に駆け寄る。

「……えへへへ。なんとか無事みたい……」

自分に笑みを向ける娘を見て安堵した時

ドスッ

カイルの腹から何か刃物が突き出す。

「……ごふっ！」

「お父さんっ！！！」

「カイル！」

「陛下！」

リーネアもコーストもシンダンも何が起こったのか分からなかつ

た。

「だから言ったでしょ、この攻撃は避けられないって。僕と遊んでる最中に余所見しちゃダメ」

白い少年ディアナは大鎌が刺さったカイルの腹をそのまま切り裂いた。

「ぐがあああああああああああああつ！」

「いやあああああああああつー！」

カイルは激痛に叫び、リーネアは頭を抱えて悲鳴を上げる。  
ディアナはその光景に狂喜する。

[illegible]

「貴様あつ！」

シンダンはズタボロの体に鞭打ち、ディアナに数多の矢を射る。だがその攻撃は雷で叩き落とされる。

「があああああああああああああああつ！」

カイルは渾身の力でディアナを薙ぎ飛ばした。

「ぐあつ! !」

その攻撃でディアナは反対側の壁まで吹き飛ばされる。

「ぐぼあっ！」

カイルは血反吐を吐く。グングニルを杖代わりにしてなんとか立っている状態だった。

「お父さんっ！」

「陛下！」

「くっ……カイルっ……」

リーネアはなんとか正気を保ってカイルに近寄り、コーストとシンダンは満身創痍の身体をなんとか動かして駆け寄る。

「コースト……シンダン……」

カイルは寄って来たコーストとシンダんに耳打ちをする。

「……了解……しました」

「……！ カイル！」

コーストはカイルに抗議しようとするがカイルに制される。

「何も……言うな。恐らく……これが最善の……策……。『エツダ』

さえ……あいつの手に渡らなければ勝ち……なんだ」

「それじゃありーネアはどうするっ？！」

コーストはカイルを考え直させようとするが、カイルは息も絶え絶えに喋り続ける。

「大……丈夫、そこはちゃんと考えて……ある。だから心配……する……な」

「だが……」



カイルはグングニルを本に戻し、別の本を取り出す。  
そして、

「『北欧に語られし神々の物語 炎の国ムスベルヘイムが王・スルトが振いし炎の魔剣 絶望に納められし巨人の剣<sup>ツナギ</sup> 万物に害成すその焰<sup>ほむろ</sup> 顕現せよ！ レーヴァティン！』」

新たに取り出した本から書界陣が現れそこから幅広の刃を持った両刃の片手剣が現れる。

「はああっ！」

シンダンが矢を放つのをやめ、カイルがレーヴァティンを振うとディアナとカイル達の間<sup>マ</sup>に炎の壁が現れる。

「これで少……しは、時間を稼げる……はず……」

「陛下、俺の方の準備はできてます」

「わかった」

カイルは頷き、グングニルを召喚した本でもレーヴァティンを召喚した本でも無い三冊目の本を取り出す。

「『北欧に語られし英雄の物語 神が鍛え打ち砕き 小人が鍛え直しし魔剣を以て悪竜を討ちし屈強な英雄 顕現せよ！ ジークフリート！』」

そして、大きな黒馬に跨がった漆黒の騎士が書界陣から現れた。

「主上、その怪我はなんだ？」

ジークフリートは馬上から訝しそうにカイルに尋ねるがカイルは、

「合図を……したら……娘と……コーストを連れて『あいつ』のところに……」

それだけ言ってリーネアの元に行く。  
その姿にジークフリートは小さく

「……御意……」

と呟いた。

「リーネア……」  
「お父さん……」

カイルはリーネアを愛しそうに抱き締める。

「リーネア……ごめんな。お前には……いつも……迷惑……ばっか……掛けて……たな。しばらく会えなくなるけど……元気に……暮らせよ」

カイルの言葉にリーネアはもう二度と父親と会えない気がした。

「お父さんっ……居なくなっちゃ嫌だよ？」  
「居なくなる……訳ないだろ」

カイルは哀しみを湛えた笑みを浮かべる。

「コーストとかの言う事……ちゃんと聞いて……もっと女の子らしく……なれよ……」

「余計なお世話だよ」

カイルは本を三冊取り出してリーネアに手渡す。

「……これは？」

「リーネア……にプレゼントだ。大事に……しろよ。ジークフリート」

「ひゃっ」

ジークフリートは何も言わずにリーネアを自分の前に乗せる。コーストはすでにジークフリートの後ろに跨がっていた。

「ジークフリート、コースト後は任せた」

「……っ。分かってる……」

コーストは悔しそうに答え、ジークフリートは黙って頷く。

「お父さん……ちゃんと帰って来てね。約束だよ？」

「ああ……約束……だ……」

お互いの小指を絡める。和国に伝わる約束の時の詩。

『指切りげんまん嘘ついたら針千本吞ます、指切った』

小指と小指が離れる。カイルは一言、

「行け」

と言つて炎の壁の方を向いた。

ジークフリートが馬に鞭をいれりと窓に向かつて走り出す。

「お父さんっ！！」

リーネアが叫ぶ。カイルは振り向きニツと笑つ。

「愛してるよ、リーネア」

そしてリーネアを乗せた馬は窓から飛び出し夜の闇に消えていった。

カイルはそれを見届けシンダンに目配せする。シンダンは頷き、詠唱。

「『ハルダの道化の物語 万人を騙す欺瞞の道化 すべてを欺き万物を騙すその力 我が思い描く姿と成せ！ 顕現せよ！ 虚言の道スクラウン化師！』」

書界陣から三体の人形が現れそれぞれがリーネア、コースト、シンダンの形を取る。

「シンダン……すまないな。ひと……まずお前は隠れて……いて……くれ」

「本当にいんですか？」



シンダンは釈然としないようだった。

「ああ……シンダン。後は……頼んだぞ」

「……はいっ！」

シンダンはカイルの言葉を噛み締めて答え、窓の隙間に身を隠した。

カイルはそれを見届けた後、炎の壁を消す。

「ふう〜もうやんなっちゃうよ！」

ディアナは煤けてはいるが傷は一つも無い。

「あつ皆戦闘体勢だね。いいよ、もっともつと遊ぼう」

カイルは楽しそうに言うディアナをさげすむ様に見る。

「遊びの時間は終わりだ小僧。今はお仕置の時間だよ」

そして、二人はぶつかりあう。

深夜の街道を三人を乗せた馬が駈ける。誰も何も言わず沈黙が三人を支配する。

ズズンッ！

凄まじい轟音にジークフリートは馬を止め音がした方を見る。  
リーネアは愕然としてそれを見た。

王宮の上部が跡形も無く吹き飛んでいた。

「……えっ」

リーネアは信じられなかった。

「…ジークフリート、早く行こう」

「分かっている」

再び馬が街道を駆け出す。

「戻らなきゃっ！ 戻ってお父さんの無事を確認しなきゃっ！」

コーストもジークフリートも何も言わない。

「ねえっ、ねえって……ねえってばあ……」

リーネアはただ泣き崩れた。

街道しばらく進むと不意にジークフリートは馬を止めリーネアと  
コーストを降ろす。

リーネアはまともに立てずコーストに支えられて立っていた。

「もう限界か……」

「ああ、魔力がもう尽きる」

ジークフリートも馬も透けてきていた。

「……透けてる」

ジークフリートは馬から降り、カイルのようにリーネアの頭を撫でる。

「リーネア、主上が『約束を破ってごめんな』と……」

リーネアの顔が歪み、目から大粒の涙が溢れる。

「……嘘……つき……お父さん……の……嘘……つ……き……う……つ……つ……あああああああああああああ……」

泣き叫ぶリーネアをコーストが優しく抱き赤子をあやす様に背を撫でてやる。

「よしよし……。ジークフリート、俺達は今行く」

ジークフリートは頷く。

「ああ、リーネアが落ち着いたら『強く生きる』と伝えてくれ」

「わかった。それじゃあまた会う時まで」

「ああ、また会う時まで」

そう言い残しジークフリートは消えた。

コーストはリーネアを抱っこして王宮の方を向き、

「馬鹿野郎が……」

と呟き街道を歩き出した。

〳〳七年後〳〳

クラディウス城のとある一室。天蓋付きのベットの上にパジャマを来た綺麗な褐色の長髪を持った可愛らしい少女が寝ていた。

「うーん……邪魔するなあ……」

少女は寝言を言いながら寝返りを打つ。

「だ〜か〜らあ〜……ボクの食事の邪魔すんなっ!!」

バキッ

天蓋の柱の一本が吹き飛ぶ。  
その時部屋の扉が開き男が顔出す。

「リーネ早く起きぶっ！」

吹き飛んだ柱が不運にも男の顔面にぶち当たる。

「……………！？」

男は痛みにつずくまるが元凶たる少女・リーネはそんなことに意にも介さず気持ち良さそうに涎をたらして寝ている。

「えへへへ…もう食べらんないよお…」

男は憤然と立ち上がり布団をひっぺがす。

「起きろーっ！」

「ふあっ？」

リーネはむっくりと上体を起こし、寝ぼけ眼で男を見る。

「……………おはよ、……………おやすみ」

「……………」

男はそんなリーネの頬を引っ張る。

「ひふあいつ！ ひふあいよっ！ おふいふっふえ、おふいふっふえふあ！」

男が手を放すとリーネは頬を擦ってむくれる。

「いったあゝ。なにすんだようっ。折角気持ち良く寝てたのにつ  
！」

「折角気持ち良く寝てたのにつじゃない！今日は入学式だぞ？  
今何時だと思ってる！」

「え？」

ベットの脇に置いていた瓶底に厚い眼鏡を掛けて時計を見ると9  
時45分。

「……………嘘……」

リーネは愕然とする。

「トリアスもシイナに引き摺られて学校に向かったぞ」  
「どうして起こしてくれなかったんだよおっ！」

リーネは慌ててベットから降りる。

「何度も起こした。起きないお前が悪い」

急いでクローゼットを開けて制服を出し、パジャマを脱ぐとズ  
ボンに手を掛けたところで動きが止まる。

「コーストさん……」

コーストは気付かずに喋り続ける。

「大体、俺だって行かなきゃいけないのに待ってやってるんだぞ？」

「コーストさんっ！」  
「ん？ どうした？」

コーストがリーネを見るとズボンに手を掛けながらジト目で自分を見ていた。

「出てってくれない？」

「……お、ああ。すまんすまん」

コーストが出て行くのを確認すると急いで着替えていく。

制服に着替え終わり長い髪を二本の三つ編みにしていると扉の向こうからコーストが話し掛けて来た。

「リーネ！ 先に行ってるからな！」

「うん！ わかったっ！」

返事をしてから急いで長い三つ編みを編んでいく。

「よしっ！ これでばっちり！」

リーネは鏡で自分を確認すると急いで部屋を出てこの城の敷地内にあるクラディウス司書学校に駆けていった。

「遅刻する~~~~っ!!」

少女が少年と出会う時『運命』という名の『悲劇』が動き出す。



三篇『叙情詩』へ

のウタ〈（前書き）

この回は読まなくてもなんら問題ありません。

ああ、今日も月が丸い

神にも魔にも見離されているボクは壊れてる？

くだらない

クダラナイ

くだらない

クダラナイ

神とか魔とかボクには無関係だ

壊れてるのはボクじゃない

壊れてるのは世界だ

……やっぱりボクもコワレテルネ

あの日あの時あの場所で世界がボクが壊れた

あの日

ボクの両親がピンクの塊になってボクにフってキタ

雨みたいでおかしかったな

あの時

好きなあの子がイッパイイッパイヨガリ狂って

ボクが狂ってイッパイイッパイ人の中身を撒き散らして

ボクはあの子をはんぶんこ

あの場所

あの子がカエツテきて

ボクは

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

グチャグチャにして

あの子は

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

何度も

元にモドッタ

それが楽しくて

愉快で

ユカイで

ゆかいで

ふたりでワラッタ

ああ、今日も月が丸い

ボクの周りを男達が囲む

大きな鎌を持ってボクは踊るようにクルクル回る  
クルクルクルクルクルクルと

回る

まわる

マワル

ボクが回るとボクの周りにたくさんの真っ赤な噴水

ボクは笑った

愉快だなあ

ボクはあの子の方を振り向いた

あの子はクスクス笑ってる

ボクはあの子をはんぶんこ

あの子はクスクス笑いながらはんぶんこ

ああ、今日も月が丸い

あの子がはんぶんのまま立ち上がる

アイシテルワ

ボクは嬉しくてはんぶんこのあの子にキスをした

ボクもだよ

ボクもあの子も狂ったように笑い出す

さあ、そろそろ行こうか

うん、ソウネ

ああ、  
今日もなんて月が丸くて赤いんだろう

### 三篇『叙情詩』へ

### のウタ〈（後書き）

相変わらず不定期更新です。すいません…  
テストなんかクソ食らえっ！なんて叫びたい。

と言っ訳で、今日はこの辺で終わります。

## 第一章『学校』 一篇へ入学式

クラディウス司書学校　そこは前大戦の英雄の一人『破滅の道化』トリアス・クラディウスが創った16～18歳までの少年少女が立派な『司書』になる為の学校である。

「……講堂は何処だ？」

アメナは校内を歩き回っていた。辺りを何度も見回しているが講堂が全く見当たらない。中庭に出たり、校庭に出たり、女子トイレに入ってしまった。校内のあちこちを彷徨い歩いている。

廊下の角でふと歩みを止める。

「いかな、どうしたものか……」

途方にくれていると廊下の向こうから叫び声が聞こえてきた。見ると誰かが物凄い勢いで走って来る。

「遅刻だあつ！　つてえ退いて~~~~~っ!!」  
「……!？」

ドガッ!!

「いったたあ……」

「ぬっ……うっ……」

アメナは走って来た誰かと激しくぶつかり倒れる。

「……あっ！　だ、大丈夫？」

ぶつかってきた誰かは瓶底眼鏡を掛けた少女だった。少女は心配そうにアメナの顔を覗きこむ。

「……うむ、なんとか……」

少女は安堵の表情を浮かべる。

「ほう……良かったあ」

「安堵するのは良いのだが……早く、退いてくれないか？」  
「えっ？」

少女はアメナの胸の上に乗っていた。  
……息が……しずらい……

「ごっ、ごめんなさいっ！」

少女は慌てて胸の上から飛び退き、アメナは、

「いや、構わない」

と言い立ち上がった。

「本当に……ごめん……」

「何、気にしないでくれ。突っ立っていた俺も……」



アメナはそこで少女に目を奪われた。綺麗な褐色の癖っ毛、腰辺りまである二本の三つ編み、瓶底眼鏡から覗く澄んだ薄浅葱色の瞳、白雪のような肌、華奢な身体付き。アメナはその少女に触れれば消えてしまう様な儚さを感じた。

…………… 本当に綺麗だ…………… だが……………。

「どうしたの？」

「…おお、すまない」

アメナは自分が少女を見て惚けていた事に内心驚いていた。

「綺麗だと思ってな……………」

「えっ…………… そ、そんなき、綺麗だなんて…………… そんな……………」

アメナに真顔でそんなことを言われた少女は頬を染めてクネクネと身体を動かす。

よ、よく見ればこの人ちよつと格好良いかも……………。

そんな少女の思いは敢え無く打ち砕かれる。

「ただ、」

「ただ？」

「君の胸は少々自己主張に掛けるようだな」

「…なっ！」

まさかの発言に少女は絶句した。

「パットとブラで誤魔化しているようだが誤魔化し切れて無い」  
「…………… なっ！」

少女は慌てて自分の胸を両手で隠す。

「そんな君には豊胸体操なるものを教えてやろう。まず、こう掌と掌を合わせてだな」

アメナは掌と掌を合わせる。少女はキツとアメナを睨み付ける。

「ん？ 俺は何か君に対し失礼な発言をしてしまっただろうか？ そんなこと言った覚えはないんだが…」

その発言に少女はついに我慢ならなくなった。

「…っ！ つの鈍感変態ヤロー……っ！！」

ブォッという風切り音を立てて少女の拳がアメナの腹にめり込む。

「ぐぼあっ！ ……ナイス……パン……チ……だ」

「ふんっ！ もう最悪だ！ 完全に入学式に遅刻しちゃったよっ！」

アメナは膝から崩れ落ち、少女は憤然と廊下の向こうに消えていった。

薄れ行く意識の中アメナは思う。

……入……学式……には……でれそう……にな……。

そして意識は途切れた。

クラディウス司書学校の講堂。アメナと少女が正面衝突していた頃、この学校の新入生達と教師達が講堂に集まっていた。

美しいブロンドの髪を持った端整な顔の長身の男が新入生達の前に出て威厳のある口調で祝辞を述べ始める。

「私が、校長のトリアス・クラディウスだ」

校長の予想外の若さに新入生はざわつき始める。

「本来ならば私の前に新入生代表の挨拶なのだが……代表者であるアメナ・ムラクモ君がまだ来ていない。そのため、私が先に祝辞を述べる事となった」

新入生達は静かになる。

トリアスは講堂内を見渡し、口を開いた。

「まず、我等クラディウス司書学校は君達を歓迎するっ！

諸君等はこれより三年間を此所で過ごし、立派な司書、司書騎士、創界士、はたまた創界鍛冶師となる為に学んでいく事となる。また、この三年で諸君らは辛い事・苦しい事を乗り越え、友人らと切磋琢磨して遊び、学び、恋をして悔いの無い青春を謳歌することだろう。大いに結構だ！ 私もそうなる事を願っている。ここに再び宣言しよう、私達は君達を歓迎するっ！」

盛大な拍手が講堂内に鳴り響く。トリアスは右手を上げてその拍手を止める。

「静粛に！」

全員が拍手を止めるとトリアスのさっきまでの威厳に満ちた声が  
一変する。

「つー訳で建前は終わりっ」

かなり軽かった。その変わり様に新入生達は啞然とする。

教師陣はそんなトリアスを止めようと駆け寄るが見えない壁に閉  
じ込められていた。

「うつひゃつひゃつ 今日こそ言いたい事全部言わせて貰うぜい

！」

「トリアス貴様あっ！」

教師達の中にいた短髪の大男が猛然と見えない壁に水を纏った大  
剣を振るう。

「今日のはそう簡単に破れねえよ、コースト！ ざまあみやがれっ  
！」

新入生達はただただ成り行きを見守るしかない。識神の無詠唱召  
喚というハイレベルな技術を持つてなされる超低レベルな争い（？）  
に新入生は成す統べないのだから。

トリアスは新入生の方を向く。

「さてお前等に何故女子だけ制服なのか教えてやろう。それはな…

…」

そこで言い淀み、何故か新入生達は息を呑む。

「俺は制服姿の女の子が大好きだからだあ！ ようこそ！ 女の子  
達！ とっとくたばれ！ 野郎共！」

男子の一部が離れて、女子は全員引いている。

「トリアスーーーーッ!!」

「この学校の恥らしい~~~~~っ!!」

教師達は叫びながら必死に壁を破壊しようとするが壊れない。

「あっはっはっ聞こえないなあ~~~~」

そんな騒ぎのせいで講堂に少女が入って来た事に誰も気付かなかった。

「何これ……」

少女が見たのはドン引きしている自分と同じ新入生達。そして笑いながら女子達を値踏みしている目をしたトリアスとそんな彼を止めようと足掻く教師達。

「……トリアスおじさん最悪だ……」

その時少女とコーストの目と目が合った。たったそれだけで二人は頷きあう。

『やれっ!』

『了解!』

少女は手近にあった椅子を掴んで大きく構え、投げる。  
天誅っ!!

凄まじい速さで椅子がトリアスに向かっていった。

スゲエなこりや。上玉揃い……ん?

「ぎゃばっ!!」

椅子が顔面にぶち当たる。  
その拍子に壁が消えた。

「今だ! 掛かれっ!」

教師達はトリアスを押さえ込む。  
コーストは少女によくやったと目配せをする。  
少女はニツと笑った。

「ぎゃああああっ! 離せえっ!」

トリアスは教師達に何処かに連れて行かれる。  
少女は呆れ顔、新人生はただ啞然とするのみだった。

新入生達の前にはコーストが立っていた。トリアスは教師達に取り押さえられている。

「実技担当のコースト・クライムです。先程は校長が乱心してぶっ！！」

「誰が乱心だあああつ！」

コーストが横に吹き飛ぶ。ビツとコーストに指差し、やけくそ気味に言いやる。

「まともな事言えいんだろっ！ 言ってやるさ！ 見てろよこんちくしょうっ！」

トリアスは新入生達に向かって高らかに言う。

「いいかお前等っ！ 人、エルフ、鬼人、貴族、平民……。この学校には多種多様な人が来る。だから、種族や身分で差別とかいじめとかしたら俺が全力でそいつを叩き潰すからな。そいつのすべてを否定してやる。覚悟しておけよ」

そう言ったトリアスに何人かが腰を抜かしていた。それほどまでに怖かった。

「まあとにかく……」

突然、トリアスが崩れ落ちる。そこにはとても色っぽい女性が立っていた。少年を引き摺りながら。

「あつ」

少女は引き摺られている少年を見て小さな声を上げる。  
コーストは起き上がりその女性に囁いた。

「シイナ、お前何処行つてたんだ？」

「すいません、校内の見回りをしていました」

シイナは新入生達に一礼。

「大変失礼しました。皆さん、これにて入学式は終わりです。解散して下さい。また、各部屋に教科書等が配付してありますので管理をしっかりとしてください」

新入生達はザワザワと入学式の内容について話合いながら講堂から出て行った。少女もその集団に紛れて出て行った。

はあ……折角の入学式があつた男とおじさんのせいで台無しだよ。  
心の中で文句を言いながら。

「シイナ、そいつはなんだ？」

トリアスを校長室に放置した後、コーストとシイナは少年を寮の部屋へと引き摺っていた。

「廊下で倒れているところを見つけました」

「はあ？　なんで廊下で倒れてたんだ？」

「分かりません。ですが良く見ると新入生のアメナ・ムラクモだつ



たので一応講堂に引つ張つて来たんです」

引き摺られている少年の名前を聞きコーストは苦笑する。

「……こいつがアカネの息子かよ」

「髪の色艶がそっくりです」

「確かにそうだな。新入生代表の挨拶を務める筈だったってことは適性テストの成績はトップか……」

「はい。ただ『性格』以外はですが……」

淡々と語るシイナに訝しげに聞くコースト。

「は？　なんだそりゃ。そんなに性格悪いのか？」

「悪いかどうかは分かりませんが面接の時、デストルが憤然と会場から出て行き、ケイミイは泣きながら会場を出て行ったそうです」

「……………何やったんだよ、こいつ」

コーストはそう言って未だ気絶し引き摺られているアメナを見た。  
……ムラクモ。お前の息子は本当に大丈夫か？

真っ暗な闇の中真っ白な少年が真っ黒な男の背後に笑って立っていた。

真っ黒な男は言う。

「ついに始まるのか」

真っ白な少年は笑う。

「違うよ。『それ』はまだもう少し先さ。今日別の報告」

真っ黒な男は尋ねる。

「どんな報告だ？」

真っ白な少年は狂喜の笑みを浮かべて言う。

「『破滅の道化』の元に『エツダ』と『日本書紀』、そして『ヴェーダ』が集まったよ」

「ほう……」

「それだけじゃなくて、『天照の鬼姫』『終焉の破壊神』『破戒の舞姫』の子供達も『破滅の道化』の元に集まったのさ」

真っ黒な男は何の反応も示さない。

「だからどうしたというんだ」

「ウッフフ。なんでもないよ」

「そうか。それでは『あの方』よろしく伝えておいてくれ」

そう言つて眞つ黒な男は居なくなる。

「もうっ、つまない人だなあ。まっ、いっかそんなことより……」

真つ白な少年は英雄の子供達に思いを馳せる。  
そして

[illegible]

狂喜……いや狂気の笑い声を残して真つ白な少年は闇に消えていった。

## 二篇《ルームメイト》（前書き）

お待たせしましたあっ！

いやぁー、高校野球を見ていると自分の青春は黒ずんでみっともない気がしてならないっす！

頑張れ！ 高校球児！

と、いう訳で始まります。

## 二篇《ルームメイト》

……待て、待ってくれっ！ 君の、君の名前を教えてはくれないか？

アメナは一本道だけしかない闇の中、長い褐色の三つ編みをなびかせながら前を走る少女を追いかけていた。

しかし、幾ら走っても少女には追いつかない。道の向こうに光が見えて来る。

む、出口が近いな。

ここから出る前に少女に追いつこうと足を速める。  
光が大きくなり少女は手前で立ち止まった。

よしっ、追いつい……っ？！

追いついたと思った瞬間少女は振り返り、素早く着流しの襟を掴みアメナごと倒れる。そして、アメナが走って来た勢いを使い巴投げ。

ぬっおっ！

アメナは光の中に吸い込まれ

「あんがあっ！！」

ベットから起き上がったアメナが周囲を見回すと自分の部屋と見知らぬ二人だった。

先程の悲鳴の正体は分からなかったが見知らぬ二人はルームメイトだろうと見当を付ける。

「君達が俺のルームメイトか？ ベットの上からで申し訳ないがアメナ・ムラクモという。よろしく」

ルームメイト達はポカンとしていたが、背が小さく、その顔だちも背丈相応の少年が気を取り直して挨拶をした。

「あっ、はい。よろしく。僕はタナミス・ケントレアっていうんです」

それに背の高く無表情で顔の半分以上を髪で隠した少年が続く。

「……………テラス・アスモデア」

テラスが自己紹介をしたところでアメナはある事に気付いた。

「よろしく。ところで此処は四人部屋の筈だが……………」

そう聞くとタナミスは苦笑をするとベット脇から髪の毛の短い筋肉質で憎めない顔をした少年がぬっと出て来た。

「てえめえ〜、人様に頭突きかましといて無視かよこの野郎っ！」  
「君に頭突きをした覚えは無いが？」

怒鳴る少年に対してアメナはしれつと答える。

「こ、この野郎……伸してやる！」

襲いかかって来る少年をタナミスが後ろから抱き着いて止める。

「わあああつ、暴力はいけないってば！」

「ええいつ、離せえつタナミスッ！」

「駄目だよっ！ アメナ君はほんとに気付いてなかったんだからさつ、ねっ？ わかってよっ！」

（……まるで、ダメな兄をなだめる出来た弟の図、だな）  
アメナがそんなことを考えているとテラスがベット脇からのっそりと出て来た。

「……！ 気配を感じられなかった、凄いな」

テラスは二人を指差し、

「………双子」

「……なるほど、確かに顔立ちが似ているな。………一卵性双生児か？」

「………そう……バカの方……ニケル・アルビーノ」

ニケルはタナミスを振り切りアメナに、ではなくテラスに掴み掛かる。

「テメエツ、今俺の事バカって言いやがったな！」  
「ちよつとやめなつてば！」

ニケルはテラスの襟首を掴んでガクガクと揺さぶり、タナミスがそれをやめさせようと後ろから抱き着く。

テラスは揺さぶられているのを意に介さずアメナに話かけてくる。

「……………ニケルが、倒れてたのは……………君が、起き上がる時……………ニケルが……………君の顔を覗いてたから……………ニケルの自業自得？」  
「なんだと！」  
「だからやめてつてば！」

（賑やかな奴等だな。悪くない）

「ニケルと言ったか、不可抗力だったようだから気にするな。ともあれ今日からルームメイトだ、よろしく」

「あーはいはい、俺の自業自得だよっ！」

ニケルは憤然としながらもアメナに軽く笑いかけた。

「よろしくな」

「ああ、こちらこそ」



「なあ、アメナは貴族なのか？」

「いや、俺は孤児院で暮らしていたが？」

「じゃあアメナはニケルと一緒にだね」

アメナはタナミスの言葉に違和感を覚えた。

「タナミスは貴族なのか？ ニケルとは双子の兄弟と聞いたが？」

「ああ、色々とあんだよ」

「うちは貧乏貴族だから……」

寂しげな表情をするタナミス。

「む、すまない。無粋だったな」

「気にすることじゃねえよ。ところで、なんで入学式にいなかったんだ？ 代表の挨拶だったろ？」

「不覚にも気絶してしまつてな」

「は？」

ニケルとタナミスの顔には疑問が浮かび、テラスは変わらず無表情。

「うーん、先に名前を聞いておくべきだったか……だが、なぜ怒っていたのだ？ ああ、思い出ただけで……」

アメナはあの時の少女を思い出しながらどこか遠くへ逝ってしまった。

「おい、アメナ？」

「……………まさに女神だった……………」

「アmena君!？」

「……………はっ!」

タナミスに叫ばれて我に返ると全員が心配そうにアmenaを見ていた。

「大丈夫?」

「大丈夫か?」

「ああ、問題無い。入学式にいけなかった理由だったな。迷子になり、とても可憐な少女に出会い、なぜか怒ってしまった少女の素晴らしい鉄拳を食らい、気絶してしまったからだ」

「……………変人……………」

テラスの容赦ない指摘。それでもアmenaは、

「ふっ、それはいい」

と笑った。ニケルもタナミスもその言葉に絶句するしかなかった。

「何二人して間抜け面をしている? 変人だと? 結構じゃないか、人間誰しも他人には理解出来ない一面を持っているものだ。それが理解出来なければ出来ない程、人は変人と呼ばれる。つまりは、変人とは自分が他人と違うという事を他人に認められる事。そうは思わないか?」

そんなアmenaにニケル達は呆れ顔だった。

「なんか……………これで入試トップなのかと思うと……………」  
「そうだね、釈然としないよ」

二人の言葉にアメナは驚愕する。

「何？ 俺はそんなに成績が良かったのか？ 試験官が二人程会場を出て行ってしまったから点数は低いと思ってたんだが……」

三人に？マークが浮かぶ。

「はっ？」

「アメナ君、一体何をしたのさ……」

「うむ、あの時は確か女性試験官があまりに幼く見えた上に化粧と香水が強くてな、『子供が化粧なんてするんじゃない。肌に悪いぞ？ 親が心配するから早く帰りなさい』と注意したら泣きながら出て行ってしまった」

「……………」

「も、もう一人は？」

「もう一人はヅラがバレバレだったのでな、『見るに耐えないからそのヅラは外した方が良く』と言ったら怒って出て行ってしまった」

ニケルは呆れ返ってしまい、タナミスは苦笑いを浮かべるだけだった。



## 二篇《ルームメイト》（後書き）

いかがでしたか？

次は二、三日以内に更新出来るよう頑張ります！

### 三篇〈食堂〉

今の時刻は六時を少し過ぎた頃。クラディウス司書学校の食堂は新入生、在校生問わずテーブルに着き、大変な賑わいを見せていた。その中でアメナ、タナミス、ニケル、テラスの四人も例に漏れずテーブルを囲み夕食を食べている。

「んぐんぐ、なかなか美味しいな」

「そうだね。特にこのミルクフィッシュの香草蒸しは絶品だよ」

「ガツガツガツガツッ！」

「……………ズズッ……………」

アメナとタナミスは料理を褒めながら、ニケルは一心不乱に、そしてテラスは淡々と。

そんな四人の食事が半ばに差し掛かった頃、

「あれ？」

四人が振り向くとそこにいたのは背丈はタナミスよりも頭半個高いくらいの小太りの少年がいた。少年の後ろには痩せぎすで背の低い蛇を思わせる目つきの少年と筋骨隆々でスキンヘッドにサングラスを掛けた男がいた。

小太りの少年はタナミスとニケルを見て嫌らしい笑みを浮かべた。

「これはこれは、誰かと思えば卑しい貴族崩れのケントレアのタナミスと汚らわしい爪弾者のニケル・アルビーノじゃないか」

「……………トレイユ」

「デメエ……………」

タナミスとニケルは表情を強張らせてトレイユを睨み付けた。  
トレイユは更に厭味を二人に浴びせる。

「それにしても、まさか君達がこの学校に入れるとは思わなかったよ。ま、君達の事だ、すぐに家に呼び出されて退学するんだろうね」

ダンッ！

トレイユの厭味に堪え切れなかったニケルはこめかみに青筋を立て、拳をテーブルに叩き付けた。

「おい、トレイユ……それ以上言ってみろ、お前をぶち」

「ストップ、ニケル」

タナミスはニケルを止めて、まだあどけないその顔に酷薄な笑みを浮かべた。

「ニケル、こんなの食って掛かる価値は無いよ。所詮は親の七光だけで守ってくれる人がいないと何も出来ない貴族の誇りが微塵も無いアホ男だよ。きつとオルティーニさんは息子のあまりの不甲斐なさに毎夜枕を濡らしている事だろうさ」

その情け容赦の無い言葉にニケルはクッククツと笑いを堪えて、トレイユは顔を真っ赤にして激昂した。

「き、貴様アアッ！ お前らっ、やれ！」

「上等だあっ！」

『それ』に気付いたのは、言い争いも気にせず食べていたテラスと食堂にいた一部の上級生だけだった。その内の一人、女子に囲まれていた上級生のクライヴは愉快そうに口角を上げた。

「ふうん、なかなかやるじゃん。あれで一年……か」

「「「っ！！？」」」

ニケルとトレイユの下僕二人の間に割って入ったのは銀色に煌めく刃を持った一振りの宙に浮く太刀。

三人は驚きに身を固め、タナミスとトレイユを驚き目を見開いていた。

「……なにこれ」

「な、ななな……」

当事者全員が動けなくなると太刀を静かに素早くアメナの元へと向かった。

アメナは来た刀を脇に浮く鞘にしまい、嘆息した。

「ふう……、まったくお前たちは何を考えてるんだ。ここは殴り合いをする場所であれば、口論する場所でもない。食事をする場所だぞ。それにここは人が集まる場でもある、もっとよく考えて行動



しろ」

アメナの言葉にトレイユは忌々しげ舌打ちし、

「クソッ、覚えてろよ……。行くぞ」

下僕二人を引き連れて食堂から出て行った。

出て行った後ニケルはブスツとした不機嫌な顔で席に戻った。タナミスは苦笑しながらアメナに謝る。

「ごめんね、アメナ」

「いや、気にするな。次は気を付ければいい。」

ところであのトレイユとかいう男と何か因縁があったみたいだが……」

タナミスは苦笑したまま、口を開いた。

「うん、小さい頃から色々であつてさ」

「ったく、何なんだよアイツは。俺達が一体何したって言うんだよ、クソッ！」

ニケルはイライラと声を荒げて食べ掛けの夕食に手を付け始めた。面白い様にみるみる減っていく料理。

「おかわりして来るっ！」

ニケルは皿を持って厨房へと駆けて行った。

「タナミス。あれは？」

「羨ましいよね、あれでストレスとか悩みとか全部吹っ飛ばんだか

らさ」

タナミスは本当に羨ましそうにニケルを見ていた。  
そんなニケルにテラスはボソリと言呟いた。

「……………アレは……………バカで単純……………だから……………」

タナミスは苦笑を深めて、アメナの顔からは何も感じ取れない。  
テラスは一瞬だけ微笑む。

「……………でも……………そこが、ニケルの良い……………所……………だよ」

「ありがと、テラス」

タナミスは微笑み、嬉しそうに食事を再開した。

「ところでさ、その刀は何なんだ？」

ニケルはデザートのパバロアをがつつきながら好奇心に満ちたま  
なざしでアメナに尋ねた。

見るとタナミスもニケルと同じまなざしでアメナを見ていた。  
アメナはやはり双子なのだなとしみじみと思いながら答える。

「この刀は『大通連』という。俺の愛刀だ」

「へえ、愛刀なのか……………」

感心する双子にテラスは溜め息を吐いて呟いた。

「……………それで……………納得……………するなよ」

「なんだよ、文句あるのかよ」

ニケルもタナミスもムツとするがテラスはサラリと無視してアメナを見つめる。

「……………アメナ……………『識神』を……………呼び出せるんだ。……………どうして?」

そのまなざしは尊敬が入り交じった好奇のものだった。

「「うそっ! アメナもうこんな『識神』だせるのっ!?!」」

双子は双子で似たような驚き方をしていた。

(……………うーむ、どう答えるべきだ?)

アメナは困っていた。自分では大した事をしたつもりは無いし、アキトの元で訓練したとはいえ大通連の顕現自体は訓練する前で気付くと出来ていたのだからどうしても質問されても答える事が出来なかった。

そんなアメナに注がれるのは教えてオーラ全開の三人のまなざし。

「「「……………」」」

「むう……………」

答えに窮した挙句にアメナは、デザートの団子を口に詰め込んでお茶で流し込み、

「実はこの後用事があるのでな、御免！」

脱兎のごとく食堂から駆け出した。

「あつ！ 待ちやがれ！」

「なんで逃げるのさ！」

「……………捕獲！」

三人は腹立たしそうな表情で猛然とアメナを追いかけ始めた。

## 四篇〈夕食〉

ここはクラスディア城内の食堂。トリアスは信じられないという表情でテーブルを見つめていた。

「……おい」

トリアスの険の籠った呼び掛けにシイナは何かマズい事をしただろうかと不思議そうな表情で聞き返した。

「はい、なんでしょうか？」

「なんでしょうじゃない、あれはなんだ？」

トリアスが指を指した先には、リーネとコーストが熾烈な闘争を繰り広げていた。

「あつ！ コーストさん、それボクの肉じゃが！」

「うるせえ！ それは大皿に盛ってるやつだろ、誰のもんでもねえつ！ ああつ！ おまつ、俺の豚の角煮食いやがったな！」

「へへえ〜んだつ！ ボクの肉じゃが盗るからだ！」

「このヤロ〜ツ！」

シイナはその光景を見てますます首を傾げる。トリアスが何を言いたいのか皆目見当がつかなかった。

「コーストとリーネが食い意地の張り合いをしていますけど……それが何かしましたか？」

「違う！ そこじゃない！」

トリアスはテーブルを叩いてシイナに詰め寄った。

「この料理はなんだっ！！」

「貴方の注文通り、和国の料理ですが？」

「いや、確かに注文通りだけでも……こういう事じゃ無いんだよ！」

トリアスが泣きそうな顔で指した先にはご飯、卵、めざし、沢庵が。ちなみに、リーネとコーストのは大皿に盛った肉じゃがとご飯、梅干し、茸の味噌汁、豚の角煮、茄子の漬物、シイナのはご飯、茸の味噌汁、焼魚、おひたし、茄子の漬物だった。

「ならどういふ事でしようか？」

「料理が貧相過ぎるだろっ！」

瞬間、トリアスの顔が恐怖に引きつった。

猛獣も裸足で逃げ出す殺気にコーストとリーネも思わず手を止め、引きつった顔で二人の方を見た。

シイナはその無表情を崩して男も女も関係無く振り向いてしまい、そんな優しくて美しい魅力的な笑顔を浮かべた。しかし、その口から漏れ出たのは、

「今日した事を忘れたとは言わせない。黙って食え」

その笑顔にはこれっぽちも似つかわしくない恐ろしくドスの効いた声だった。

「た、ただいまあっ！！」

トリアスは半泣きで必死にご飯を掻き込んでいった。その姿は英雄としての偉大さも校長のして威厳もかけらも感じる事は出来なか

った。とはいえ、そんなものは初めから感じられなかったが。

「……ねえ、コーストさん」

「なんだ、リーネ」

リーネは呆れた顔でトリアスとシイナを見ながら去年や一昨年、その前の年を思い出していた。

「なんだかんだで毎年やってるよね、アレ」

言いながらリーネはコーストの茄子の漬物に箸を伸ばす。

「そうだな、飽きないよなあ。去年は新入生をナンパしたんだっけな」

コーストは伸びてくるリーネの箸を払い除けながら、しみじみと思いつく。

去年、トリアスは入学式が終わった後、シイナの目を盗んで当時新入生の首席で一番美しかった少女を口説いた。少女は困惑し、トリアスが必死になると流石にシイナに気付かれ、気絶させられた。その後の夕食では本当に少しの量を無理矢理食べさせられ、その後トリアスはトイレに駆け込んだのだった。

「ハアウアッ!!」

そして案の定、トリアスは席を立ちトイレへと全力疾走していった。

「ああ、やっぱり」

リーネは心底呆れながら肉じゃがに伸びたコーストの箸を払い除けた。

「ま、自業自得だわな……って、お前さっきから何しやがる」  
「……………食事」

リーネはわざとらしくはにかんだ。  
コーストはこめかみに青筋を立て、リーネの食事を襲った。

「あっ!!」

リーネが声を上げた瞬間に最後の角煮はコーストの腹へと収まった。

「ぼ、ボクの角煮いつ!!」

「自業自得だバーカ!」

「バツ!?　ぐぬぬぬ……そっちがその気ならボクだって!!」

こうしてリーネとコーストの食を巡る熾烈な闘争は再び幕を開けたのだった。



夕食という名の闘いが終わり、リーネ、コースト、シイナは食後のデザートである和国の伝統生菓子『羊羹』を食べながら談笑している。トリアスは未だ廁の住人となっていた。

コーストはふと今日の入学式にリーネが来るのが妙に遅かった事を思い出した。

「そういえばリーネ。お前今日の入学式来るの遅過ぎだぞ？」  
「いや、あ、あれは……」

リーネは咄嗟に誤魔化そうとして、失礼極まりないデリカシー0の最低な少年の事を思い出した。怒りのボルテージが見る見る上がり、すぐ、最高潮に達した。

「あ、あのヤローッ！！」  
「うおっ！？」

リーネは叫び、持っていた竹のフォークのような物が粉微塵に握り潰された。

コーストは突然の叫びに驚き、椅子から転げ落ちた。

「イッタタタ……、一体どうした？」

コーストが尻を擦りながら聞くとリーネはまた思い出したらしく、拳でテーブルに穴を開けた。

「あの男！ 目付きは悪い上、奇怪な格好で、ボクの事綺麗とか言つといて胸に自己主張が欠けるって言ったんだよっ！？ 豊胸体操がなんだっ！ ボクだって好きでこんな胸してるんじゃないやい！

ド畜生!!」

激しい剣幕で捲し立てるリーネは今にも暴れ出しそうだった。コーストが慌てて宥めようとすると、

「おい、おちつ」

「リーネ、落ち着いて下さい」

シイナが静かに言った。

「そんなことで怒っても何なりません。そもそも貴女はまだ成長期、これから幾らでも大きく」

シイナが最後まで言う前にリーネがうつすらと瞳に涙を浮かべてシイナの自己主張の激し過ぎる胸を指差した。

「化け物オッパイのシイナさんにそんなこと言われたくないよっ！

」

「!!!?」

シイナは呆然とした表情で化け物オッパイと何度も呟きながら固まっていた。

リーネはフッフと黒い笑いを浮かべて呟いた。

「今度会ったら殴り殺してやる……」

「いや、殺すなよ」

コーストはツツコミながら溜め息を吐いた。

そこでコーストは、ふとさっきリーネが言った男の特徴を思い出す。

目付きが悪い、奇怪な格好、失礼な言動。

コーストが思い出したのは一人の少年。特徴がピッタリ一致していた。

……だから、気絶してたのか。それにしてもリーネの制裁を受けてよくアレだけで済んだよな。……あ。

コーストはまた思い出した。

同じクラスじゃん……。

「はあ……」

コーストは再び深い溜め息を吐いた。その表情はとても疲れていた。

ああ、明日の身体測定、誰か代わってくれねえかなあ……。

リーネはそんなコーストの思いに気付く事なく獰猛な笑みを浮かべた。

「覚悟するがいいっ！ 下衆男！」

こうしてクラスディア城での夕食はリーネの宣戦によって幕を閉じた。

#### 四篇へ夕食（後書き）

次も二、三日に更新出来るよう頑張ります。  
感想や評価、よろしくお願いします

## 五篇〈朝〉（前書き）

今回は眠い中書いたのですこぶる微妙かもしれませんが悪しからず。

## 五篇〈朝〉

時刻は朝七時。

アメナは日課の鍛練と朝風呂を終えて、和国産のお茶を飲んで寛いでいた。

「ふむ、やはりアイツらがいないと静かだな。悪くない」

そろそろ寝ている三人を起こそうと椅子から腰を上げようとする  
とタナミスがムツクリとベットから起き上がった。

「ふわぁ……あれ、アメナ？」

タナミスはやはりまだ眠いのかボーッとした目でアメナを見ていた。その様子が余りに孤児院でよく見た光景に似ていてアメナは思わず頬を弛めていた。

「ああ、おはようタナミス。もう七時だ。早くしないと朝食にありつけないぞ」

「うん、分かったぁ」

タナミスはノソノソと鈍い動きで部屋の洗面所に向かった。

「さて、残り二人を起こすかな」

ここは食堂。三人揃って朝には弱いらしく、タナミスとニケルは眠い目を擦りながらパンを頬張り、テラスはスプーンをスープに突っ込んだまま寝ていた。

「テラス、起きろ」

アメナが軽く揺るとテラスは下がった瞼を上げようと努力したが上がりず、結局瞼が下がったまま情けない返事を返した。

「…………ふあい」

そして、そのまま。

「ぐー」

テラスは夢の中へと落ちていった。器用な事に体勢はスープにスプーンを突っ込んだまま。

アメナが啞然としてると、

「可愛いっ!!」

誰かが、タナミスに突っ込んだ。

「ニヤグワアッ!？」

「ンアッ!？ な、なんだあつ!？」

「……っ!？」

余りに突然の衝撃にタナミスは猫の様な悲鳴を上げ、その悲鳴にニケルとテラスは驚き、覚醒した。

上級生だろうか、ブロンドの長い髪を後ろに束ねた大人びた女性がタナミスに抱き付きその立派に実った二つのスイカの様な実を密着させていた。

「うふふふ」

女性はそれはそれは幸せそうな顔で笑っているが、タナミスは自分を襲った者を見て恐怖に顔を引きつらせておかしな声を上げていた。

「あ、あばばばば……」

アメナははつと我に返り、ひとまず女性に声を掛けた。

「君はタナミスとは知り合いなのか？」

そんな質問をしたアメナにニケルが信じられないといった視線を送るがアメナも女性もそんな視線など無いかの様に振る舞った。

女性はタナミスから離れる事なく答えた。

「いいえ、知り合いじゃないわ。貴方達はこの子の友人？」

ニケルはさつきとは打って変わって女性の自己主張の激しい胸を凝視し、テラスは目の前で起こっている事を気にする事無く黙々と



朝食を食べていたのでアメナが懇切丁寧に自分とタナミス達を女性に紹介した。

「俺はこの三人とはルームメイトで昨日出会ったばかりだが三人は前から面識があったようだ。」

そして、俺はアメナ・ムラクモという。昨日入学したばかりの新生だ。よろしく。

こっちで黙々と食べてる暗そうなのがテラス・アスモデア。

それから、そのさつきから君の立派な胸に不躰な視線を送っている助兵衛がニケル・アルビーノ。

最後に君が抱き付いている子供と見紛う程小さく可愛らしいのがタナミス・ケントレア。そうそう、タナミスとニケルは双子の兄弟だそうだ」

その説明と紹介に女性は感心したように頷き、タナミスかあ、素敵な名前だねとタナミスに頬擦りをしだした。そして、

「ヤナアー……ッ!!」

「きゃっ!!」

タナミスは暴れて女性から逃れ、テーブルを飛び越えてアメナの後ろに隠れた。

「ど、どうしたのだ?」

タナミスはガタガタと震えながら非難がましい目をして、

「な、なんで助けてくれないのさ、なんであんなのと和やかに会話してるのさ、なんで僕をスルーしてるのさ、女怖い、巨乳怖い、止めて僕を食べないで……」

と呟く様に捲し立てる。流石に悪く思い、

「タナミス、すまない……聞いてない……」

謝ったがタナミスはアmenaにしがみついて呟くばかりで聞いてはいなかった。

「むう……」

どうしようかと唸ると女性が少しバツが悪そうに、

「あー、もしかして、私なんかマズい事しちゃった？」

とアmenaに尋ねた。

「いや、さっきも言ったが俺はつい昨日彼らに会ったばかりだから皆目見当が……おおっ」

アmenaはそういえばここには弟であるニケルがいた事を思いだし惚けるニケルに尋ねた。

「ニケル」

「はあ……スゲエ……やっぱいる所にはいんだなあ……」

ニケルはまったく反応せずただひたすらその胸を見つめていた。  
……この男。

アmenaは呆れ、持っていた箸でニケルの脳天を突いた。

「イダッ！ 何する！」

ニケルは短く悲鳴を上げて我に返った。

アメナは溜め息を吐いて馬鹿者とニケルをたしなめた。

「自業自得だ。いつまでも女性の胸を凝視する奴があるか？」

「うつ……」

ニケルはぐうの音も出ず、アメナは追い討ちを掛けるために言った。

「それに、胸を見たいなら女性に頼むのが礼儀だろう」

沈黙が降りた。ニケルも女性も微妙な表情になった。

アメナは一体何が起こったのか分からなかった。なぜ黙るのだろうかと考えるが答えは出てこない。

「むう、俺は何かマズい事を言ったのだろうか？」

「……………女性に、胸を見せろ……………と頼むのは……………最低……………だと思  
う」

「何っ!？」

女性を見ると苦笑いしながら頷き、ニケルも真面目な顔で頷いた。

……………あのジジイ、嘘を教えやがった。

アメナは今度帰ったらアキトをボコボコにすることにして強引に話を戻す。

「それは悪かった。それよりニケル、聞きたい事がある」

アメナは女性、ニケル、テラスの視線に堪えながら未だ自分にしがみついたタナミスを指した。

「これはどうなってるのだろうか？」

ニケルはああ、と頷き、思い出した様に困った様な笑いを浮かべた。

「いやさ、なんかコイツいつの頃からか女が苦手ってか恐怖の対象になっててさ」

「それでこれか……」

女性は困った顔で頬を掻く。

「そっか、ごめんね、タナミス君」

タナミスはアメナの後ろでコクリと頷いた。その事に女性は安堵し、

「フフ、そういえば自己紹介がまだだったね。私はナク」

「あつ！ もうっ、ナクスどこ行ってたんだよ！」

ナクスの自己紹介を遮ったの瓶底眼鏡に茶髪の本の長い三つ編みの少女・リーネだった。

「ごめんごめん、いやぁーちょっと可愛い子見つけちゃってさ。その流れでその子の弟と友人と親交を深めてたんだよ」

そう言って笑いながらナクスはリーネを自分の隣りに立たせた。リーネはアメナを見つけて顔を引きつらせ、アメナはリーネを見て目を見開いた。

「改めて、私はナクス・ルミル。それでこの子はリーネ。ん？」

そこでナクスは気付いた。アメナとリーネがお互いを凝視していた。

ナクスが二人に話し掛けようとした瞬間にアメナは歓喜の表情を浮かべて呟いた。

「リーネか、素敵な名だ……」

そして、アメナが感きわまった瞬間、リーネの顔が般若となってアメナの顎を拳で打ち抜いた。

## 五篇〈朝〉（後書き）

次は多少間が開くかと思いますがどうかよろしくお願いします。

## 六篇〈身体測定・前〉

リーネが先頭をズンズン歩き、その後ろをアメナ、タナミス、ニケル、テラス、ナクスがぞろぞろと話をしながら歩いていった。

「いやぁー、すごいね、アメナ君は。リーネの拳を食らって意識が飛ぶだけの人を初めて見たよ」

ナクスは感心したようにうんうんと頷きながらタナミスを何度もチラ見していた。

「そんなに凄いのか？」

ニケルの素朴な質問にナクスは重く頷いた。

「ええ、それはもう恐ろしい位に。その気になれば素手で大木を倒せるのよ！」

「「「「！？」」「」」」

その言葉にこの場にいた男子は驚愕に目を見開いた。目の前を歩く華奢な少女にはまかり間違ってもそんなことが出来るとは思えなかった。

「そんな馬鹿な」

とニケルは笑い飛ばし、

「そ、そうだよね」

とタナミスは半信半疑で同意し、

「…………でも事実…………だったら…………恐怖だ…………」

とテラスは恐れおののき、

「しかし、あの威力はかなりの物だったからな。有り得ん事では無いな。うむ」

とアメナがしみじみと言った。

「……」

沈黙が降りた。そんな様子にナクスが苦笑しているとニケルが沈黙を破った。

「ダメだダメだ！ これじゃ男のプライドが廃っちまう！」

ニケルはリーネの前に回り込み高らかに宣言した。

「今日の身体測定で勝負だ！！」

リーネは立ち止まり腕を組んで考え込み、

「…………勝負…………勝負か……………そうか、何で思い付かなかったんだ！！」

とてもスッキリした表情で目の前のニケルを無視してぐわんと勢い良く振り向き、スカートがフワリと膨らみ、その下の純白の三角形が現れ消えて、二本の三つ編みが遅れて元の位置へ戻る。



「そのコンコンチキのストコドッコイ下衆男！　ボクと身体測定で勝負しろっ！！」

アmenaに向けたリーネの宣戦布告。しかし、誰も何も答えを返さない。なぜだかナクスは額を押さえて溜め息を吐いていた。

「？」

不思議に思い小首をかしげるとナクスが呟いた。

「……パンツ、見えてたよ」

「え　うそっ！？」

慌てて自分のスカートを押さえるが、もう後の祭。アmena達の脳裏には純白のそれがしっかりと焼き付いていた。

「……み、見た？」

ニケルは呆然と頷き、タナミスは顔を真っ赤にして激しく頷き、テラスは無表情で頷き、アmenaは感慨深げに頷いていた。

「うむ、やはり君には白が似合うな。いや、本当に良い物を見せてもらった」

アmenaのその満足そうな言葉にリーネは羞恥やら怒りやら屈辱やら何やらで顔を真っ赤にして、

「うぎゃあー！！」

「フグッ！」

悲鳴を上げながらアメナを殴り飛ばし、

「邪魔だあつ！」

「ウボオツ！？」

ニケルを蹴散らして走り去ってしまった。

「うわああああんっ！」

という泣き声を残して。

アメナ達は学校指定の運動着に着替え、体育館で身長、体重、座高などを測り終わると校庭へと向かった。

「アメナは結構体重あるんだね」

「タナミスはやはり軽いな。女子が羨む事請け合いだ」

「そんなこと……まああるけど、あんまり嬉しくないな」

「気にするな。その愛くるしい小動物の様な見た目も個性だ。誇れば良い」

「そう……かなあ？」

「ああ、それに俺達はまだまだ成長期。そう焦る必要は無いさ」

「そっか……そうだね！　ありがと、アメナ！」

「何、気にするな」

何とも和やかな、仲の良い兄弟の様な会話をするアメナとタナミス。その様子をニケル、テラス、ナクスは思い思いの表情で見っていた。

「……なんか、微妙に複雑な心境なんだが」

「……………ジエラシー？ ……プッ」

複雑そうなニケルを見てテラスは馬鹿にした様に笑う。笑うとは言ってもやはりまったくの無表情で笑った為にニケルは噛み付くタイミングを失って、うぬぬと唸るだけだった。

「あはは、案外ブラコンの気があるのね、弟君」

「やつかましいっ、弟君言うんじゃねえ！」

ナクスにもからかわれ、ニケルは腹立たしげにナクスを睨む。

「大体、女子のお前が何で俺達と一緒に動いてるんだよ！」

ナクスはフフンと笑いさも当然の様に、

「タナミス君が可愛いからよっ！」

言い切った。どうしたら良いのか分からなくなったニケルはうなだれ、

「ごめん。聞いた俺が馬鹿だったよ……………」

校庭に出るとあつ、という声が上がった。そこにいたのは眉を吊り上げたリーネ。リーネはズンズンとアメナに歩み寄り、指を突き付けた。

「やっと来たね。いい？ 身体測定の後、魔力と実技の測定で勝負だっ！！」

アメナは頷き、ならばと提案した。

それは少しばかりの下心と純粋な興味、そして出来る事ならという希望を持って。

「ならば賭けをしよう。負けた方が勝った方の言う事を一つだけ聞く。どうだろう？」

その提案に、リーネは不敵に笑った。

「いいよ、乗ったよ。あとで後悔しても知らないからねっ！」

「もちろんだ」

「ところで……」

リーネはアメナから視線を外し、じつと物欲しそうにニケルに隠れたタナミスを見つめるナクスを見て叫んだ。

「なんでナクスがそっちにいるんだよっ！」

「だって可愛い男の子がこっちにいるじゃないっ！」

……そうだった、ナクスはそういう奴だった。

リーネはガツクリと肩を落としてうなだれた。

背筋、腹筋、握力、反復横跳び、1500メル走（1メルは1メートル）など数多くの種目を終え、残すところは魔力の測定と新入生の実力を見る為の実技となった。

「ここからは俺が担当する。自己紹介は入学式の時にしたからいいよな」

コーストは懷から薄い本を数冊取り出す。その表紙には『必殺！魔力メーター！』と書かれていた。

「いいか、これからこの本を使ってお前達の魔力量を調べる。方法は簡単だ。この本に魔力を込める。それだけだ。とにかくやってみろ」

そう言つて側にいた生徒に一冊渡す。

「お、オレっすか？」

突然の事に困惑する生徒にコーストはいいからやれとせつついた。

「は、はいっ！」

生徒は本を左手に持ち、目を瞑る。

次第に本が淡い光に包まれ、そして

ポンッ

軽い音と共に80セル程の刃渡りの両刃の剣が現れ、地面に落ちた。

生徒がどうしたら良いのか分からずオロオロしているのをしり目にコーストはその剣を拾いあげる。

「この様にこの本に魔力を込めると魔力を込めた本人に合った武器が出て来る。そして、肝心の魔力についてだが魔力が大きければ大きい程出て来る武器の変化が大きくなる。

例えば単純に武器がデカくなったり、派手な装飾が着いたりな。

ちなみに、このサイズにこの位の装飾なら中の中といったところだな。

そついう訳だから早く六列くらいに並んでくれ」

生徒達はガヤガヤと興奮気味に並んでいく。そんな中、リーネは再びアメナを睨み付ける。

「さあ、勝負だ!」

「うむ」

「はあ………下の下かあ」

タナミスは早々と魔力の測定を終え、現れた簡素極まりない小振りの杖を弄びながら測定の様子を少し離れた木の下で眺めていた。自分の魔力の低さに嘆いていると、

「ターナーミースくん」

ご機嫌なナクスがタナミスの隣りに来た。周りには自分以外誰もいない。諦めて、ナクスを見ると手から二の腕辺りまである多少大仰な感じのする鉄甲を装備していた。

ナクスの美貌に、それは余りに似つかわしくないだろうとタナミスは思った。思いはしたが、明らかに自分の魔力を軽く凌いでる事にシヨックを受け、ますますヘコむ。ついでに怖いから少し距離を取る。

「ど、どうしたの？ ぼ、僕、を笑いにでも来たの？ それとも才能無しって言いに来たの？」

ナクスへの恐怖と自分にダメさに泣きそうになるのを堪えながら尋ねた。

ナクスはあからさまに距離を取った事を気にした風も無く微笑みながら優しい声音で尋ね返す。

「どうしてそう思うのかな？」

「だ、だって……」

タナミスは言い淀んだ。他の人に比べて余りに粗末に見える自分の杖。しかも、よりもよってそれをトレイユだけでなく、ここにいる全員に見られた。

きつと皆に馬鹿にされる。或いは、同情、される。いつもと、一緒。

そんなのは嫌だった。

「魔力は最低だし、皆の足手まといになるから。迷惑、掛けるから……」

思っている事をそのまま言いたくなくて、タナミスはそう言った。ナクスはタナミスのネガティブさを意外に思いながらやつぱり可愛いなと、もつと彼の事を知りたいなと思う。

ナクスはタナミスの頭を優しく撫でる。タナミスは突然の事に身体を強張らせる。それでもナクスは止めず、母親が子供を諭すように言った。

「誰だって、迷惑を掛けずにいる事は出来ないよ。大体、魔力は鍛練次第で増やせるんだからさ、足手まといになるなんて思っちゃダメだよ？」

「私達は夢の為にここに来てるんだからこんな早くから挫けないで、ね？」

「……うん」

タナミスは素直に、怯える事無く頷いた。

「ありがとう」

「!？」

タナミスの感謝の気持ちを込めた笑顔にナクスの顔が真っ赤に染まった。

「? どうしたの？」

もう怯えの無い問いになんでも無いと答えながら動揺していた。



あ、あの笑顔は反則よっ！

そんなことを思いながら動揺を顔に出さないようにしながら立ち上がり手を差し延べる。

「ほら、そろそろリーネとアメナくんがやるみたいだから行こ？」

「うん！」

笑顔で頷き、タナミスはナクスの手を取った。

コーストは生徒達が次々と武器を呼び出すのを見ながら感心していた。

今年の生徒のレベルは高い。

そんな話があったがこの全体の魔力の高さを見る限りその話は本当だった。

ふと見ると、リーネがアメナを睨みながら本を持っていてアメナもリーネを気にしていた。

コーストに嫌な予感がよぎる。

次の瞬間、大地を揺るがした様な重い音が響いた。

「フフン！ どうだっ！？」

自慢げなリーネの目の前にはリーネの身の丈程ある柄を持った鉄の鎚があった。

対するアメナの手には漆黒の鞘に龍の鰐の立派な大太刀が握られ

ていた。アメナはリーネを気に留めずその刀を抜いてみた。

「……ふむ」

その美しい刀身に満足そうに頷いて刀を納める。

アメナとリーネは同時にコーストの前に立ち、

「どちらの魔力高いだろうか？」

「どっちの勝ちっ!？」

アメナはしっかりとした、リーネは経緯が分からなければ意味の不明な質問をした。

コーストは頭を抱えてコイツらは、と溜め息を吐く。

正直厄介事はごめん被りたいコーストは

「どっこいどっこいだよ。どちらも文句無しの上の上だ。だから

」

と、途中で言うの止めて、苦労の滲んだ深い溜め息を吐いた。

アメナとリーネは『どっこいどっこい』までしか聞いていなかった。

「うう~~~~っ、次の実技では絶対に白黒はつきりさせるからねっ!」

「ふむ、望むところだ」

妙なヤル気を見せるアメナとリーネ。

頼むから問題事は起こさないでくれ、心の底からそう思うコーストだった。



## 六篇へ身体測定・前（後書き）

遅くなりました。いかんせんテストが……。次の更新も少し時間が掛かると思われますが悪しからず。評価・感想を心の底からお待ちしています。

## 七篇〈身体測定・後〉

ニケルは自分の目がおかしくなったと思い目を何度も何度も擦っていた。

「? どうしたのさ?」

そうタナミスに尋ねられても反応出来ず、ニケルはただただタナミスとナクスを見つめる事しか出来なかった。

タナミスが自分の結果に落ち込んでいたのは知っていたし、だからこそ、安易に慰めてはいけないと放っておいたのに、どうしてこんな事になっているのか、考えれば考える程ニケルは訳が分からなくなっていた。

そうこうしてる内にアmena、リーネ、テラスが戻って来た。

「!」

「!?!」

アmenaとリーネが驚き目を見開き、ニケルと目を合わせる。そして、テラスは瞳を動揺で揺らしながら、

「……………その手は、何?」

指差した先にはしっかりと握り合った二人の手。

「「え?」」

同時にその手を見て、

「「うわっ!？」」

同時に手を離れた。

顔を見合わせるニケルとリーネとテラス。二人の様子は怪し過ぎた。

アメナは少し考えた後なぜかタナミスよりも顔が赤いナクスを見て、ナクスを手招きした。

「ど、どうしたのかな？」

「……どうしてそんなに顔が赤い？」

「いや、別に赤くなんかないよ？」

「では、どうして手を繋いでいたのだ？」

「え、いや、それはその、成り行きってゆっ……ひいっ!」

いつの間にか自分を囲んだ面々に思わず小さく悲鳴を上げたナクス。

「ちょ、ちょっとリーネ! アンタアメナ君と仲悪いんじゃない?」

「それとこれとは別だよ。大体、朝は平然と抱き付いてたのに手を握ったのを恥ずかしそうに離すのはおかしいよ？」

「うっ……」

その指摘にぐうの音も出ないナクス。テラスは畳み掛ける様にボソリと呟いた。

「……………タナミスに……………本気で惚れた……………とか？」

耳まで真っ赤になるナクス。アメナとテラスはフツと笑い、リーネはソフフと含み笑いをして、ニケルは羨ましそうな顔でタナミスをチラリと盗み見た。

「な、なんなのよ」

「フツ、無粋な真似はせんさ。頑張るといい」

「……………ファイト」

アメナとテラスはそう言つてタナミスの元へと行つてしまった。  
ニケルはその微妙な表情のままナクスを見て、

「……………」

「お、弟君？」

「……………いや、なんでもねえよ」

そしてそのままトボトボとタナミスの方へと歩いて行つた。

「何あれ？ ……………うつ」

目の前には相変わらずニヤニヤと笑うリーネ。リーネは満面の笑  
みを浮かべ、

「ボク、全身全霊を懸けて応援するよ！ 親友だもんね！！」

「……………はあ」

ナクスは疲れた顔で溜め息を吐くしかなかった。

魔力の測定が終わり、次はいよいよ実技。

コーストは真剣な表情で一人一人に聞かせる様に説明を始めた。

「お前達、さっき出した武器は持つてるな？ 今からそれを使って模擬戦を行ってもらう。いいか、真面目にやれ。じゃないとケガするし何よりこれからの実技の授業に影響するからな！」

コーストの説明に生徒達の表情は心なしか緊張している。

「じゃあまづは……うつ」

コーストは模擬戦をやらせる生徒を選ぼうとして思わず顔を逸らした。そこにはボクにやらせろというオーラを全開にしてコーストを睨んでいるリーネがいた。

……本当に勘弁してくれねえかなあ。

そんなことを思ってもリーネの視線はコーストを捕らえて離さず、結局コーストは折れた。

「はあ……じゃあ、リーネ、まづはお前だ。あとは……」

「さあ勝負だ！！」

コーストが選ぶ前にリーネはアメナに鎚を突き付けた。

「うむ、望むところだ」

アメナもヤル気満々でそれに返す。

頼むから穏便にしてくれよ。

コーストは深い溜め息を吐いて、

「じゃあ、リーネ・アルバスターとアメナ・ムラクモ前に出ろ」



この場にいる誰もが見守る中、アメナとリーネは対峙する。

「原形止どめない位にボッコボッコにして、百億万べん土下座させてやるんだから」

微妙に頭の悪いリーネの言葉にコーストは育て方間違ったかなと内心で少し落ち込む。

アメナは不思議そうにリーネに尋ねた。

「百億万はおかしくないか？」

生徒達から苦笑が漏れ、リーネは顔を真っ赤にして思いつきり眉を吊り上げる。そして、怒鳴ろうと口を開けた瞬間にコーストに遮られた。

「うるさいぞお前達！ いいか、これは遊びじゃ無いんだぞ！？」

分かったならちゃんと話を聞け。お前達の持つてるのは本物という訳じゃ無いが撲殺位なら軽く出来る。まあ、お前達の来ている運動着は物理、識神に対して高い防御力を持っているからそこはあまり気にしないでいい。だが、危険な行為だけは絶対にするな？

そして、制限時間は五分。勝敗は俺が独断で決める。以上だ。質問は受け付けないからな」

コーストは生徒達の『はい』という返事に満足げに頷き、アメナとリーネを見る。

「そういう事で、アmena、リーネ、構えろ」

アmenaは左手に刀を構え、腰を落し居合抜きの構えを取る。一方のリーネは少し前傾の姿勢で両手にその大きな鎚を持つ。そして

「始めっ！」

コーストの号令と共にリーネがアmenaに向かって駆け出す。アmenaは駆けて来るリーネを見ながらアキトに教わった事を確認する。

恐れず踏み込め。

一撃で決めろ。

抜く前に勝て。

「ふっ！！」

アmenaの気合と同時に試合は終わった。

リーネの鎚は振り上げられたままでアmenaの刀はリーネの首筋で寸止めされていた。

「うっ……」

驚愕する。まったく反応出来なかった。そして告げられる試合終了の号令。

「そこまで！ 勝者、アmena！」

## 七篇〈身体測定・後〉（後書き）

どうも、ようやくと更新出来た雨永祭です。

この作品はなかなか上手くないです。ファンタジーは難しいですね。

この作品、かなり長く続きます。全体を通して300を超える話数になってます。そのくせ更新が死ぬ程遅いのだから面目ありません。それでも、この作品をよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0895c/>

---

少年と少女と本の叙事詩

2010年10月10日05時59分発行